

社会運動の世界的連関と地域性

Globalization and Regional Characteristics of the Social Movement

武内 進一

TAKEUCHI Shinichi

東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター
Tokyo University of Foreign Studies, African Studies Center

キーワード

社会運動 地域性 アフリカ

Keywords

social movement; regional characteristics; Africa

Quadrante, No.25 (2023), pp.29–30.

本日は、小美濃さんと中野先生から、頭が整理されるコメントをいただき、感謝しております。本書は中山智香子先生の実質的なご尽力で完成したのですが、2020年にBLM運動が盛り上がるなかで、アフリカ研究者として感じた驚きから企画が生まれました。その核にあるのは植民地主義と私たちのつながりということで、中野先生が整理してくださった内容に尽きています。

本日はこのような機会をいただいたので、本書にうまく書けなかったことを述べたいと思います。私は自分の第15章で、南アフリカ共和国のローズ・マスト・フォール(Rhodes Must Fall: RMF)運動がヨーロッパやアメリカに波及し、BLM運動につながって、今度はそれがアフリカに影響を及ぼす、といった運動の拡散や連続を強調しました。私は、こうした連続性を重要だと考えたのですが、その一方で、異なる地域の運動を同じ視点から意味づけて一括りに捉えるのは慎重であるべきかもしれないという気もしていました。

南アフリカ、米国、ヨーロッパ(といっても国

ごとに多様ですが)、さらに日本など、各国で盛り上がった運動がお互いを眼差す視点には、「連帯」だけでなく「すれ違い」も少なくないと感じています。植民地主義の展開や現地社会への影響が世界各地で大きく異なる以上、それに抗する運動の性格が異なるのは当然です。私の章では異なる地域の運動の連関を強調したのですが、「すれ違い」の方はあえて触れずに蓋をしました。しかし、そのことにもきちんと触れておくべきだったと思うようになりました。

この思いは、2021年7月に南アフリカで起こった大暴動について考えるなかで、さらに強まりました。これは前大統領の収監をきっかけに起こったもので、300人近くが死亡する惨事となりました。政権与党内権力闘争の色彩も濃いものでしたが、暴動を主導した人々とRMF運動を主導したグループとの接点が指摘されています。大暴動を通じて、RMF運動が既存の社会秩序転覆を目指す動き、暴力や革命につながる動きと密接に連動していることに、改めて気づかされたのです。

本書第7章で友常先生が論じておられるよう



に、米国のBLM運動にはそうした側面が一定程度あると思います。しかし、その他の地域では、社会秩序転覆という企てからはかなり距離があるのが実態ではないでしょうか。RMF運動発祥の地であるケープタウン大学の活動家は、それが影響を与えたオックスフォード大学の運動を“RMF Lite”と呼んでいたそうです。

私はこうした違いを強調することで、異なる社会的背景を持った運動が結局は連帯できないと主張したいわけではありません。「すれ違い」があっても、運動は広がります。ただ、こうした社会的背景の違いを認識し、それぞれ運動の性格を理解することは、地域研究に関わる者として、やはり必要だし重要だと思うのです。なぜなら、そうした社会的背景の違いは当該地域の様々な行動に影響し、反映されるからです。昨今のロシア・ウクライナ危機のなかで、西側に同調しないアフリカ諸国の行動に関心が寄せられていますが、ここにもBLM運動が露わにした国際秩序の欺瞞性とそれに対する反発というモメンタムを見て取ることができると感じています。

BLM運動の世界的な連続性だけでなく、各国（特にアフリカ諸国）の運動の社会的背景について、もっとしっかり書くべきだったというのは個人的な反省点です。私の能力不足から、本書には十分書き込めませんでした。この点は、今後も考え続けていきたいと思っています。

本日は、こうした書評会を開いていただいたことに、改めて御礼を申し上げます。